目次

学園ミステリー

水晶の夜、翡翠の朝　恩田陸　5

鏡には映らない　米澤穂信　63

メロンソーダ・ファクトリー　青崎有吾　143

編者解説　千街晶之　185

水晶の夜、翡翠の朝

恩田陸

湿原に再び初夏が巡ってくる頃、ヨハンは退屈していた。

この学校に来る目的のひとつであった、素晴らしいスコアのコレクションもほとんど暗譜してしまっていたし、イギリスのエージェントを介して少しずつ自分の曲を売り出し、学費と小遣いを賄うくらいの著作権料を稼ぎ出すようになっていたのだ。著作権ビジネスにはまだまだ研究の余地がある。もし自分が父の跡を継げなかったとしても、自分をそこそこ養っていくくらいはなんとかなりそうだ。

将来の準備は着々と進んでいる。この学校にいるのもあと一年くらいだろう。

だとすると、いかんともしがたいのはこの退屈さだ。スコアを読み、高校をスキップして大学受験資格試験の準備のため、あるいはこの先の人生で役に立ちそうな知識を吸収しながらじっくり雌伏の時を過ごすのに、確かにここは最適の場所だったが、十五歳の少年にとって、あまりにも刺激がなさすぎるのもいかがなものか。

ここは優雅な檻。中で腐るかどうかは、本人の心がけに掛かっている。

彼の重要なパートナーである少女はこの早春、一足先に学校を去ってしまった。今度会う時は、彼女の才能は自分以上に開花していることだろう。その時のことを考えるとワクワクするが、しかしまずは目の前のこの退屈さを何とかしなければ。

彼はぶらぶらと校内を歩いていく。今日は土曜日。そして、彼は校長の家のお茶会に呼ばれている。

午前中は雨が降っていたが、午後になって晴れた。校長の家に向かう長いアプローチの途中からも、青く萌える湿原が見える。一年の半分が冬と言ってもよいこの北の地で、水が温み、なおかつ空の色を映して宝石のように輝くこの季節は、この狭い世界が一番美しい季節である。いつもながら、よくこのような陸の孤島に学校など作ったものだと感心する。ここには金持ちだが訳ありの生徒がひっそりと全寮制の贅沢な暮らしを送っていた。

憂理に言わせると、生徒は三種類に分かれる。『ゆりかご』は超過保護で世間の荒波に当てたくない生徒、『養成所』は芸術やスポーツなど特殊なカリキュラムを必要とする生徒、そして最も多いとされる『墓場』は、文字通りここから出てこないで欲しい生徒。これは